

## レビ記13章「潜行性の靈的病」

### 1A からだの皮膚 1-46

#### 1B 腫れ物 1-17

1C かさぶたや斑点 1-8

2C 白い腫れ物 9-17

#### 2B 傷の後 18-28

1C できもの 18-23

2C 火傷 24-28

#### 3B 疾患 29-44

1C 疥癬 29-37

2C 湿疹 38-39

3C はげの腫れ物 40-44

#### 4B ツアラアトの汚れ 45-46

### 2A 衣服 47-59

#### 1B 火で燃やす悪性ツアラアト 47-52

#### 2B 洗ってから見る七日間 53-59

## 本文

レビ記 13 章を開いてください。私たちの、清めと汚れの区別の学びは、食物規定、女の出産の不浄の期間の次に、13 章から、らい病について見て行きます。今の新改訳では、ヘブル語をそのまま音にした表記「ツアラアト」になっています。

かなり細かく、長い文章になっています。主ご自身の強いみこころを感じ取れます。聖書全体に、この話題は広がっています。旧約聖書には、ミリアムがらい病にかかり、ナアマンがらい病を患ったり数多く出て来て、新約聖書においては、イエス様が癒されるというところで終わっています。祭司が調べて行くのですが、まるで祭司が皮膚科の医者のようなことをしていきます。目に見える皮膚の症状によって、祭司ですから、そこに象徴されている靈的な現実を見て行くのです。それは、ツアラアトには、罪がいかに私たちの生活に深く潜んで、私たちを滅ぼしていくかをよく表しているからです。

### 1A からだの皮膚 1-46

#### 1B 腫れ物 1-17

1C かさぶたや斑点 1-8

<sup>1</sup> 主はモーセとアロンにこう告げられた。<sup>2</sup>「ある人のからだの皮膚に腫れもの、あるいはかさぶた、

あるいは斑点ができて、からだの皮膚にツアラアトに冒された患部が現れたときは、彼を祭司アロンのところか、アロンの子らで祭司の一人のところ連れて来なければならない。

新改訳第二版までは「らい病」と訳されていましたが、らい病というとハンセン病のことですが、これから読んでいく症状は、必ずしもハンセン病と合致しません。新共同訳では、「重い皮膚病」と訳されていて、その後に出た最近の共同訳は「既定の病」と訳しています。これから見て行くと、新共同訳が訳しているように、いろいろな皮膚病ではないかと考えられます。

再び思い出していただきたいのですが、きよさと汚れの区別において、「見ているもので、見えない霊的なことを表している」ということです。難しいことばで、「表象している」と言います。視聴覚教室にいるように、主が、私たちの心にあるものを皮膚を通して教えてくださっているのです。

聖書では、皮膚に傷を受けていることが、罪との関わりの中で語られています。エジプトにおける災いで腫瘍の災いがあり、エジプトの魔術師たちの皮膚に膿が出来て、倒れました。民数記ではミリアムがモーセにたてついたので、ツアラアトに七日間かかりました。ナアマンというアラムの将軍がいましたが、彼のツアラアトはきよめられました。エリシャのしもべゲハジが不正な利得を得たので、そのツアラアトが彼に降りかかりました。ユダの王ウジヤは、王の身分であるにも関わらず祭司の務めであるいけにえを献げようとしたところ、その規定の病にかかってしまいました。そして、ヨブ記の主人公ヨブは重い皮膚病にかかりましたが、友人はそれを彼の隠れた罪にある、と疑いました。

そしてダビデが、罪を犯したので、皮膚病の中で悲しんでいる姿を詩篇の中で読むことができます。「38:3 あなたの憤りのため私の肉には完全なところがなく私の罪のゆえ私の骨には健全なところがありません。…5 私の傷は悪臭を放って腐り果てました。それは私の愚かさのためです。…7 私の腰は火傷でおおい尽くされ私の肉にはどこにも完全なところがありません。あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。…私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。…私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。…17 私はつまずき倒れそうで痛みが絶えずともにあります。18 私は自分の咎を言い表します。自分の罪で不安なのです。(詩篇 38:3,5,7,17,18)」預言書において、エレミヤ等が、悔い改めなければいけないのに安易に「平和だ」と言っている人に対して、「エレ 8:11 彼らは、わたしの民の傷を簡単に手当てし、平安がないのに、「平安だ、平安だ」と言っている。」と言っています。

そして何よりも、主ご自身が、肉に傷を受けられて、それが私たちの罪の赦しになっているという預言があります。「イザ 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やさ

れた。」主ご自身の皮膚における傷が、このように私たちの魂と体の癒しになるのです。

再び言いますが、皮膚病を患っていればそれは罪のせいだ、ということでは決してありません。先にも説明しましたが、衛生や防疫の分野でレビ記は大きな貢献を果たしました。伝染病の流行を水際で防ぐために少しでも疑わしきは隔離するという体制は、この 13 章の中に見ることができます。けれども衛生面が主眼ではなく、あくまでも私たちのうちに潜み、広がり、そして隠れて私たちを蝕む罪の影響力を如実に表している、ということです。私たちの霊的状态を目に見える形で表象している、ということでもあります。

「腫れもの、あるいはかさぶた、あるいは斑点」は、私たちが普段、自分の皮膚にも現れますね。おできやニキビが出来たり、日焼けをして赤くなってしまうたり、汗をかいて発疹が出来たりするでしょう。その日常性がかえって油断させます。その症状が日常に表れるもの同じなので平気だと思ってしまうのです。

私たちの欲というのも、初めは何でもないようにして表れます。私たちは「思い」の中においては、特段に害をもたらしているわけではないし構わないだろうと過ぎ去らせることが多いのです。けれども、ヤコブが手紙の中で言うように、これは子供を孕んで、実を結ぶのと同じように、悪い思いは進行し発展します。「ヤコブ 1:14-16 人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。私の愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。」

<sup>3</sup> 祭司は、そのからだの皮膚の患部を調べる。その患部の毛が白く変わり、患部がそのからだの皮膚よりも深いところに見えているなら、それはツアラアトに冒された患部である。祭司はそれを調べ、彼を汚れていると宣言する。

ここで祭司に調べてもらいます。彼が行なっているのは、医者診断に似ています。医者の大きな仕事は診断することです。そして、適切な治療法を見つけることです。同じように私たちに対して、ご聖霊が心を調べてくださいます。「I コリ 2:10-11 それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほか、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにはだれも知りません。」私たちに、心の傷、罪や汚れがどのようにあるのかを、聖霊が示されることによって、初めて霊的な治癒が可能になります。

<sup>4</sup> もしそのからだの皮膚の斑点が白く、皮膚よりも深くは見えず、その毛も白く変わっていなければ、祭司はその患者を七日間隔離する。

神の完全数である七日の間、患者を隔離します。ここでは疑わしきは罰せず、ではなく、その反対で、疑わしいならば隔離であります。ツアラアの症状とは言えなくとも、その兆候が少しだけ見えている時、ここでは斑点が白くなっている、ということです。けれども、皮膚より深く見えず、毛も白く変わっていないので、ツアラアとは全然言えないのです。けれども、隔離します。

隔離については、私たちはコロナ禍で、第一波の時に、豪華客船「ダイヤモンド・プリンセス号」が横浜港に停泊したままで、そこで検査が行われたことを思い出してください。そこには、当然ながら感染していない人たちも大勢いたわけですが、その疑いがあれば隔離しないといけません。それは、本当に感染していたことが分かってから隔離しても、すでに他の人たちに接触して移してしまうからです。

はっきりしていれば、汚れている者として人々から離れることができますから、隔離の必要がありません。イスラエルの宿営から離れて住むことになります。隔離しているのは、あまりはっきりしないから、調べるためです。このように、罪の性質というのは、潜んでいるという時が危険です。心の中の苦みなど、自分ではなかなか見えないものです。その隠れた罪が、どんどん多くの人々を汚すことになります。ヘブル書 12 章に書かれています。「12:15 だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」

<sup>5</sup> 祭司は七日目に彼を調べる。もしその患部が祭司の目にはそのままに見えて、その患部が皮膚に広がっていなければ、祭司は彼をさらに七日間隔離する。

広がっていないのに、さらに七日間、隔離します。なぜなら、患部に見えるところが、まだ薄れていないからです。ただ、広がっていないというだけで、症状は変わっていないからです。

<sup>6</sup> 祭司は七日目に再び彼を調べる。もし患部が薄れ、その患部が皮膚に広がっていなければ、祭司は彼をきよいと宣言する。それは、かさぶたである。彼は自分の衣服を洗う。こうして彼はきよくなる。

かさぶたであれば、なくなりこそすれ、広がりはせんね。七日見て、広がっていないのを確認して、それでさらに七日見て、患部が薄れているのが確認できました。それで、かさぶたであると判断して、衣服を洗ってから、きよくなり、イスラエルの宿営に戻ることができます。私たちは、ここで霊的に、心にある傷、罪による汚れを自分自身で調べて行く必要があります。「139:23-24 神よ私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるかないかを見て私をとこしえの道に導いてください。」

<sup>7</sup>しかし、もしも彼が祭司にその身を見せてきよいと宣言された後で、かさぶたが皮膚に広がってくるようなことがあるなら、再び祭司にその身を見せる。<sup>8</sup> 祭司が調べて、かさぶたが皮膚に広がっているなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。それはツアラアトである。

祭司が、患者を七日隔離して、さらに隔離することが、ずいぶんと過剰な予防策だなと感じた人がいたかもしれません。けれども、このような事例があるから、厄介なのです。二週間を経ても、なお隠れていたものが出てくる可能性があるのです。症状として一時的に表に出て来て、調べると、ひょこっと潜っていきます。そしてその間に体の中で悪さをするのです。そして、一気にその症状が出てくるのです。「潜って進行する」と書いて、「潜行」する形で再発する、ということです。

今も流行っている、性病の一つ梅毒について、東京都の保健局のサイトで見てください。<sup>1</sup>

#### 梅毒の症状

症状がないこともあります。治療しないでいると病気が進行します。

##### ・第1期

感染後約3週間で、感染した場所(性器、肛門、口など)に、できもの、しこり、ただれなどができます。治療しなくても、数週間で症状は消えます。

##### ・第2期

第1期の症状が一旦消えた後に、1~3か月経つと、手のひらや足の裏など全身に発疹やブツブツができます。治療しなくても、数週間~数ヶ月で症状は消えます。

##### ・潜伏梅毒

症状がないまま何年も経過することがありますが、皮膚や内臓で病気が静かに進んでいます。

##### ・後期梅毒

数年~数10年後に、心臓、血管、神経の異常が現れることがあります。

まさに、潜行型の症状です。症状が出ては潜り、静かに病気が進み、そして次に出てくる時には体を蝕んでいます。

これが、罪の性質として聖書でも描いています。ダビデは、バテシェバと姦淫の罪を犯しました。詩篇 51 篇で悔い改める祈りを献げています。「51:5-6 ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として母は私を身ごもりました。確かにあなたは心のうちの真実を喜ばれます。どうか私の心の奥に知恵を教えてください。」壮年になってから彼は、姦淫の罪を犯したのですが、しかし、母の胎にいる時から、その罪はあったのだという告白をしています。症状は現れていないと、自分は清いのだと欺いてしまいます。けれども、その欺きで自分自身を見つめることができなくなり、いつか行いによって現れるということなのです。

<sup>1</sup> <https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryo/kansen/syphilis.html>

## 2C 白い腫れ物 9-17

<sup>9</sup> 人にツアラアトに冒された患部があるときは、祭司のところに連れて来る。<sup>10</sup> 祭司が調べ、もし皮膚に白い腫れものがあり、その毛も白く変わり、腫れものにむき出しの肉が盛り上がっているなら、<sup>11</sup> それは、そのからだの皮膚にできた慢性のツアラアトである。祭司は彼を汚れていると宣言する。彼を隔離する必要はない。彼はすでに汚れている。

ここの症状は、1-8 節の例とは異なり、慢性もの、明らかであるものです。白い腫れ物ですが、毛も白くなっていて、肉がむき出しになって盛り上がっているのです、明らかにツアラアトだと分かります。だから隔離するまでもなく、汚れていると宣言できます。そして次が興味深いです。

<sup>12</sup> しかし、もしも、そのツアラアトが皮膚に生じて、祭司が目で見ることができ、ツアラアトが頭から足まで患者の皮膚全体をおおうようなことがあるなら、<sup>13</sup> 祭司がそれを調べる。もし、そのツアラアトがその人のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。すべてが白く変わったので、彼はきよい。

皮膚病の中に「白斑」というものがありますが、その説明をすれば何となくイメージがつかめるのではないかと、思います。それはメラニン色素がきちんとできていないために起こります。ですから、白くまだらになっている皮膚の人を見かけることがありますね。それが酷くなると、全体が白くなっていきます。そしてついに、全身が真っ白になる場合もあります。

ここから、祭司の判断と宣言が、医者のものでないことがよく分るでしょう。その皮膚病が汚れているとかではなく、その症状の見た目が、霊的な心の真実を表に現しているということです。自分の罪の姿が主の前に完全に露わにされている時に、かつて主から清めをいただくことができる、ということです。イザヤ書 59 章には、イスラエル人たちの体の器官すべてが罪によって汚れている姿が描かれています。

3 実に、あなたがたの手は血で、指は咎で汚れている。あなたがたの唇は偽りを語り、舌は不正を告げる。4 義をもって訴える者はなく、真実をもって弁護する者もない。空しいことに頼り、?を言い、邪悪をはらみ、不正を産む。5 彼らは、まむしの卵をかえし、くもの巣を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶすと毒蛇が飛び出す。6 そのくもの巣は衣にはならず、自分の作ったもので身をおおうこともできない。彼らのわざは不義のわざ、暴虐の行いがその手にある。7 その足は悪に走り、咎なき者の血を流すのに速い。その思いは不義の思い。暴行と破滅が彼らの大路にある。8 彼らは平和の道を知らず、その道筋には公正がない。自分の通り道を曲げ、そこを歩む者はだれも平和を知らない。

手が流血で汚れ、唇にはまむしの毒があり、足は罪のない者の血を流すのに速い、と書いてあ

ります。頭から足のつま先まで罪にまみれている状態です。これを神学用語で「全的墮落」と言います。一部だけが墮落しているわけではありません。自分には善を行なう力が全くない、善いも思われる可能性がただ一つもない状態です。この時にこそ、私たちは、主によって与えられる清めを体験できるのです。

<sup>14</sup> しかし肉がむき出しになったときは、彼は汚れた者となる。<sup>15</sup> 祭司はそのむき出しの肉を調べて、彼を汚れていると宣言する。そのむき出しの肉は汚れている。それはツアラアトである。<sup>16</sup> しかし、もしそのむき出しの肉が再び白く変われば、彼は祭司のところに来る。<sup>17</sup> 祭司は彼を調べる。もしその患部が白く変わっているなら、祭司はその患部をきよいと宣言する。彼はきよい。

全身白い状態であれば、きよいと宣言しますが、その白い状態で肉がむき出しで出てきたら、汚れた者になります。先ほどと同じですね、きよいと宣言してもその後に出てくる可能性があります。しかし、また白く変われば、再びきよいと宣言されます。

これを霊的に見て行けば、一度明らかになった罪は、主からの清めを受けることができます。その後、罪が出てきても、その時は一度明らかになっているので、罪を認めやすいのです。なので、清められる可能性が大きくなります。大事なのは、罪を隠さないということ。これをしていれば、主のきよめが始まるということです。そして、たとえ途中で失敗しても、やり直しがききやすいということです。「箴 28:13 自分の背きを隠す者は成功しない。告白して捨てる者はあわれみを受ける。」

## 2B 傷の後 18-28

### 1C できもの 18-23

<sup>18</sup> からだの皮膚にできものができ、それが治った後、<sup>19</sup> そのできものの局所に白色の腫れもの、または赤みがかかった白い斑点があれば、それを祭司に見せる。<sup>20</sup> 祭司が調べて、もしそれが皮膚よりも深いところに見え、その毛が白く変わっているなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。それはそのできものに生じた、ツアラアトに冒された患部である。

できものが治った後で、そこに白い腫れ物や、斑点があるならば、それがツアラアトである可能性があります。グーグルの写真で、「白い腫れ物」と入れて検索すると、口内炎、瞼の裏にできる白いできものとか、実にあらゆるものが出てきました。細菌によって広がっていく可能性があるものもあります。ここで大事なのは、できものによって皮膚が負荷を受けて、そこから広がって行ってしまう、ということです。

<sup>21</sup> もし祭司がこれを調べて、そこに白い毛がなく、それが皮膚よりも深くはなく、それが薄れているなら、祭司は彼を七日間隔離する。<sup>22</sup> もしも、それが皮膚に広がってくるようなことがあるなら、祭司はその人を汚れていると宣言する。それは患部である。<sup>23</sup> もしその斑点が元のままであり、広が

っていないければ、それはできものの跡である。祭司は彼をきよいと宣言する。

単なる跡であるのか、それともツアラアの始まりであるのかは、七日の隔離によって、広がっているか広がっていないかで見定めます。

これを霊的に見るとどうなるでしょうか？何かのきっかけで傷が付き、心に罪を抱かせるということでしょう。思い出すのは、アブサロムです。妹タマルがアムノンに凌辱されて、それで憎しみを抱き、それがうめぼれとなって、ついにダビデの王座を奪い取ることにクーデターを起こしました。妹タマルを辱めた時の憎しみをそのままにして、増幅していった結果、そうになりました。

### 2C 火傷 24-28

<sup>24</sup> あるいは、からだの皮膚に火傷があって、その火傷の生肉が赤みがかかった白色、または白色の斑点であれば、<sup>25</sup> 祭司はこれを調べる。もし斑点の上の毛が白く変わり、それが皮膚よりも深いところに見えるなら、それは火傷に生じたツアラアである。祭司は彼を汚れていると宣言する。それはツアラアに冒された患部である。

火傷によって、それがきっかけで、ツアラアが表に出てきた時です。傷を受けたところを狙って動き始めています。

<sup>26</sup> しかし、もし祭司がこれを調べて、その斑点に白い毛がなく、それが皮膚より深くはなく薄れているなら、祭司は彼を七日間隔離する。<sup>27</sup> それから七日目に祭司は彼を調べる。もしも、それが皮膚に広がってくるようなことがあるなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。これはツアラアに冒された患部である。<sup>28</sup> もしその斑点が元のままであり、その皮膚に広がっておらず、薄れているなら、それは火傷による腫れである。祭司は彼をきよいと宣言する。これは火傷の跡である。

できものと同じような判断です。七日隔離して、広まっていなければ火傷による腫れにしか過ぎません。そうでなければ、ツアラアです。

聖書では、試練を火に例えているところがあります（1ペテ 1:7など）。神の与える試練は私たちに忍耐を与え、私たちが主にあって成熟する良い訓練となりますが、その反面、私たちが不信の罪を犯して、神に対する反抗として動くことがあります。荒野の旅において、水がない、パンがないというのは、彼らが主に求めて、主の真実を知る良い機会であったのですが、彼らは主に不平を鳴らし、主を試す罪の機会となりました。私たちには生活の中で、人生の中で受けた辛い経験は、主の真実を知り、主にある幸せをえる機会にもなりえますし、苦みを持ち、神の恵みから離れる危険にもなるのです。

### 3B 疾患 29-44

次から、さまざまな疾患について、それがツアラアトかどうかを調べて行く箇所です。

#### 1C 疥癬 29-37

<sup>29</sup> 男あるいは女で、頭か、ひげに疾患があるとき、<sup>30</sup> 祭司はその患部を調べる。もしそれが皮膚よりも深いところに見え、そこに細い黄色の毛があるなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。これは疥癬で、頭またはひげのツアラアトである。

これまでにあった症状とは、少し違います。皮膚よりも深いところに見えるのは同じですが、今までは白い毛が生えてきているのに対して、「細い黄色の毛」が出ているとあります。疥癬であると思いますが、黄色い毛なので「黄癬」と呼ばれているものではないか、という意見があります。ヘブル語では、「痒い」とか「引き剥がす」という意味があり、やはり非常に痒みの伴う疥癬に似たものではないかと思われます。

<sup>31</sup> 祭司が疥癬の部分を調べ、もしそれが皮膚よりも深いところに見えず、そこに黒い毛がないなら、祭司はその疥癬の患者を七日間隔離する。<sup>32</sup> 七日目に祭司は患部を調べる。もしその疥癬が広がっておらず、またそこに黄色い毛もなく、疥癬が皮膚よりも深いところに見えていなければ、<sup>33</sup> その人は毛を剃り落とす。ただし、その疥癬を剃り落としてはならない。祭司はその疥癬の患者をさらに七日間隔離する。

ここで祭司がこれがらい病であるかどうかを見極めるのに邪魔しているのが、「毛髪」です。頭にしろ鬚にしろ、髪また髭がその患部を詳しく見るのを邪魔しています。それで 33 節にあるように、その毛を剃り落します。疥癬そのものを剃り落してはいけません。

疥癬が頭髪や顎髭でなかなかその全貌を見ることができないように、そして疥癬を調べるために毛を剃るように、私たちも自分の心をそのようにして主に知らせていかなければいけません。何が私たちを、主が私たちの心を調べていくのに邪魔しているのでしょうか？ 忙しさかもしれません。いつも言っている言い訳かもしれません。立ち止まって、主に自分自身をさらけ出す、思い煩いを主に取り払っていただいて、主の前で裸になっていく必要があります。

<sup>34</sup> 七日目に祭司はその疥癬を調べる。もし疥癬が皮膚に広がっておらず、それが皮膚よりも深いところに見えていなければ、祭司はその人をきよいと宣言する。彼は自分の衣服を洗う。こうして彼はきよくなる。

きよいと宣言を受けたら、衣服を洗います。疥癬には衣服もお湯で消毒しなければいけないものがあるそうです。

<sup>35</sup> しかし、もしも、その人がきよいと宣言された後に、その疥癬が皮膚に広がってくるようなことがあれば、<sup>36</sup> 祭司は彼を調べる。もしその疥癬が皮膚に広がっていれば、祭司は黄色の毛を見分ける必要はない。その人は汚れている。<sup>37</sup> もし祭司が見て、その疥癬が元のままであり、黒い毛がそこに生えているなら、その疥癬は治っていて、その人はきよい。祭司は彼をきよいと宣言する。

他の症状と同じように、一度きよいと宣言されたのに、それでも再び広がっているのであれば、もう調べる必要はなく、汚れているとされます。霊的には、もうすでに心の内なところが調べられているので、同じようなことをしているのであれば、それは汚れから来ていることははっきりしているからです。きよめられてから、元に戻ることの愚かさをペテロは、第二の手紙で次のように話しています。「2:20 主であり、救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れから逃れたのに、再びそれに巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪くなります。」

### 2C 湿疹 38-39

<sup>38</sup> 男あるいは女で、そのからだの皮膚に斑点、すなわち白い斑点があるとき、<sup>39</sup> 祭司はこれを調べる。もしそのからだの皮膚にある斑点が淡い白色であるなら、これは皮膚に生じた湿疹で、彼はきよい。

「湿疹」とありますが、白い斑点であるとか、淡い白になっているので、私たちが普通に考える、赤みがかかった湿疹とは違うようです。共同訳には、「白皮症」と訳されていました。体に色素が足りない時に、髪の毛が金髪、透き通るような白い肌が特徴です。いずれにしても、感染するようなものではなく、体に広がるようなものではありません。

### 3C はげの腫れ物 40-44

<sup>40</sup> 男の髪の毛が抜け落ちるとき、それははげであって、彼はきよい。<sup>41</sup> もし顔の生えぎわから髪の毛が抜けても、それは額のはげであって、彼はきよい。

「はげ」は清いです。エリシャのはげを馬鹿にした若者たちは、雌熊二頭に襲われてしまいました！ 当たり前ですが、男性の頭髪の自然の成り行きです。しかし、この当たり前が、油断になってはいけないことを次に教えておられます。

<sup>42</sup> もしその頭のはげか額のはげに、赤みがかかった白い部分があるなら、それは頭のはげに、あるいは額のはげに生じたツアラアトである。<sup>43</sup> 祭司は彼を調べる。患部の腫れものが、頭のはげ、あるいは額のはげの部分で、からだの皮膚にあるツアラアトに見られるような、赤みがかかった白色であれば、<sup>44</sup> 彼はツアラアトに冒された者であって、この者は汚れている。祭司は彼を汚れていると

必ず宣言する。その患部が頭にあるからである。

そのはげの部位にらい病の患部が出来ました。逆に言うと、皮膚炎が出てきたので毛髪が落ちていた、とも考えられます。先ほどの疥癬あるいは白癬は、頭髪の中にあるから見るのがやっかいです。これは毛が既にないのですぐに症状を見分けることができます。そういう明らかなどころに症状が現れます。私たちは意外に、あまりにもはっきりと罪が出ているのに、そのことに気づいていないということがあるかもしれません。「えっ、それが罪だったの？」と今まで平然と行っている自然の営みに、実は罪だったということもあります。

#### 4B ツアラアの汚れ 45-46

<sup>45</sup> 患部があるツアラアに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。<sup>46</sup> その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる。

これまで、汚れていると宣言された、ツアラアに冒された人たちですが、宿営の外に住まわなれないといけません。彼らの存在が聖書の数多くのところで、出てきます。ミリアムがらい病に冒されたときに宿営の外に彼女はいなければいけません。北イスラエルの首都サマリヤがアラムに取り囲まれていたとき、四人のらい病人がアラムの陣営に行きましたが、彼らは町の入口にいました。それは町から出てくる残飯を自分たちが食べていたからです。城の中にはゴミさえも出てこなくなり、彼らは飢え死にするしかありませんでした。王ウリヤもそうでした。

そして新約聖書では、イエス様に近づいてきたツアラアの人がありましたね。清めてくださいと願う、イエス様は触れられて彼は清められました。清められることについては 14 章で見ます。映画「ベン・ハー」において、主人公の母と妹がツアラアに罹った場面があるのですが、あのように人々が住んでいるところから引き離されて過ごさないといけません。これがツアラアの「呪い」と呼んでもよいでしょうか？ 共同体から切り離されてしまうのです。私たちは、これが罪のもたらす結果だということをわきまえなければいけません。つまり、「孤独」になるということです。

汚れている人は、聖なる神のおられるところに住むことはできないということです。神は恵みによって、すべての人をご自身のところに近づけます。ありのままの姿で、神の家族に招かれています。けれども、聖なる御霊が与えられているので、罪から離れる聖めが始まります。汚れをそのまま留めて行くことは、できなくなります。それでも捨て去らないと、交わりから断たれることもあるのです。

#### 2A 衣服 47-59

ツアラアについて、繰り返しますが、あくまでも「見ているイメージ」によって定められていることを思い出してください。それがはっきり分かるのは、衣服の上のツアラアです。これは、重い皮膚

病とも、既定の病とも訳すことができませんね。共同訳は、はっきりと「かび」と訳しています。ほおっておくと、じわじわと広がっていくところが、これまで見た皮膚の奥に潜んで、進行させる病とも共通しているところです。

#### 1B 火で燃やす悪性ツアラアト 47-52

<sup>47</sup> 衣服にツアラアトに冒された箇所が生じた場合は、羊毛の衣服でも、亜麻布の衣服でも、<sup>48</sup> 亜麻または羊毛の織物でも、編物でも、皮でも、また皮で作ったいかなるものでも、<sup>49</sup> 冒された箇所が緑がかっていたり赤みを帯びたりしているなら、衣服でも皮でも織物でも編物でも、またいかなる皮製品でも、それはツアラアトに冒された箇所である。それを祭司に見せる。

非常に詳細に、どんな繊維や材質のものであっても、カビが出てきたら祭司に見せます。

<sup>50</sup> 祭司はその箇所を調べる。そして、冒された箇所がある物を七日間隔離する。<sup>51</sup> 七日目に彼は、冒された箇所がある物を調べる。それが衣服でも織物でも編物でも皮でも、また皮が何に用いられていても、それらに冒された箇所が広がっているとき、その箇所は悪性のツアラアトで、それは汚れている。<sup>52</sup> 羊毛のものであれ亜麻のものであれ、衣服、あるいは織物でも編物でも、またいかなる皮製品でも、冒された箇所がある物は焼く。これは悪性のツアラアトであるから、火で焼かなければならない。

かびが広がっているのであれば、洗っても取り除くことはできません。これ以上広がらないように、火で焼きます。火で焼くことが、完全な殺菌の方法です。主は、「焼き尽す火」と呼ばれています(ヘブル 12:29)。

#### 2B 洗ってから見る七日間 53-59

<sup>53</sup> もし祭司が調べて、衣服、織物、編物、またいかなる皮製品でも、その箇所が広がっていなければ、<sup>54</sup> 祭司は命じて、冒された箇所がある物を洗わせ、さらに七日間それを隔離する。<sup>55</sup> 冒された箇所がある物が洗われてから、祭司がそれを調べて、もしその部分が変化したように見えないなら、その部分が広がっていなくても、それは汚れている。それは火で焼かなければならない。それが内側にあっても外側にあっても、それは腐食である。<sup>56</sup> しかし、もし祭司が調べて、冒された箇所が洗われた後に薄れていたら、彼はそれを衣服や皮や織物や編物から切り取る。

皮膚にできたツアラアトと全く同じ処置ですね。広がっていなければ、水で洗い、七日間隔離します。それで、変化が見えない場合は、火で焼きます。変化が見えるならば、水で洗って、さらに七日間隔離します。そして、洗って薄れたら、その部分だけ切り取ります。徹底していますが、逆に言うと、すべてを火で焼くのではなく、それだけ残しているのです。主は、むやみに人をさばかれる方ではなく、一人一人を救いたいと願われています。それで、主の前に真価が試されますが、それ

が本物であれば、必ず残るということです。

<sup>57</sup> もし、その衣服、織物、編物、またいかなる皮製品でも、再びそれが現れたなら、それは再発である。冒された箇所のある物は火で焼かなければならない。<sup>58</sup> しかし、洗った衣服、織物、編物、またいかなる皮製品でも、冒された箇所がそれから消えていたら、もう一度これを洗う。こうして、それはきよくなる。」

ここも、皮膚の病と同じです。再び現れた時は隔離するのではなく、もう調べた後ですから汚れており、火で焼きます。けれども、洗ったもので、消えていたら、もう一度洗えば、清い、そのまま使えます。

<sup>59</sup> 以上は、羊毛または亜麻布の衣服、織物、編物、すべての皮製品の、ツアラアトに冒された箇所についてのおしえであり、それをきよい、あるいは汚れていると宣言するためである。

いや～、すごい細かい、徹底した神の計らいです。衣服も、皮膚も、潜行性、つまり、長いこと症状を表すことなく潜伏していること。そして症状として出てきても、また引っ込むこともあること。そして進行が遅いので、対処するのを怠りがちなこと。そして進行したときにはもう治癒あるいは修復が極めて困難である、ということ。こうした特質は、他の皮膚病にもカビにもどちらにもあります。神は、陰湿で、自分の正体を隠し、そして自分自身を滅ぼしていく罪を、その特徴に見出しておられるのです。

今回は、神の恵みを見ます。ツアラアトに冒された人たちが、祭司を通して、主の交わりの中に完全に入ることができます。聖霊によって心が調べられた人は、主の恵みで清められる希望があります。